

On Richard the Second: Some Thoughts about the Relationships between God and Men, and Those between King and Subjects

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47514

『リチャード二世』

―神と人、王と臣下のあり方と関係を巡る一考察―

高田 茂樹

シェイクスピアの『リチャード二世』は、ベストの大流行によるロンドンの劇場封鎖が開けた翌一五九五年に執筆・上演された。それは、封鎖以前に、いくつかの喜劇や悲劇と並んで、ひとときわ力を注いだ英国史劇の執筆を通して、ロンドンの劇壇にそれなりの足がかりを得て、自分の創作にも自信を深めていたシェイクスピアが、

劇場封鎖に伴う劇団の再編成を機に新たに結成された宮内大臣一座に戯曲を担当する幹部座員として迎えられて、最も早い時期に仕上げた作品の一つだった。この『リチャード二世』の中で、シェイクスピアは、それまでに自分が創作してきた『ヘンリー六世』三部作から『リチャード三世』に至る英国史劇前期四部作を主題的に引き継ぎつつ、新たな方向を意欲的に模索している。

前期四部作を通して、シェイクスピアが描いたのは、階層的な社会秩序の崩壊の過程と、そういう階層社会の基礎をなしていた人間関係の破綻に積極的に関わった人々の内面のすさまじい荒廃だったと言えよう。『リチャード三世』の結末には、そういう心理的な荒廃

を超えて、人とそれを取り巻く世界との新たな関係性を探る動きも感じられるが、それはあくまで一つの可能性を示唆するという段階にとどまっており、十分に奥行きのある精神のありようとして説得力を帯びて提示されているわけではない。

実際、『リチャード二世』から『ヘンリー五世』までの後期四部作に『ジョン王』を加えた一五九〇年代半ばから後半にかけての英国史劇の中で、シェイクスピアは、改めて、かつては疑問のない拠り所のように感じられていた、国王を頂点とする安定した階層社会の枠組みを失った後で、人々がいかにその内面の荒廃を収めて、世界とのあいだに新たな関係を築いて、心の平衡を取り戻そうとするかを探っているように思われる。これらの後期歴史劇を貫いて関心の中心となっているのは、前期の四部作の場合と同様に、内乱のさまざまな様相である。(厳密に言うると、『ヘンリー五世』は、『ヘンリー六世・第一部』と同じように、内乱そのものを描いているわけではないが、これらの劇でも、そこに描かれている出来事は国内の安定

や不和の問題ときわめて密接に関わっている。しかし、前期の歴史劇では、内乱は社会の混乱や人々の精神的荒廃をもたらす原因として提示されていたのに対して、これら後期の作品では、むしろ、社会の混乱や人々の精神的荒廃は初めからすでに存在しているように見える。言い換えれば、前期の史劇の人物たちは、アクションの展開を通して社会の崩壊の渦に避けがたく巻き込まれていくが、あるべき社会の本来の堅固な階層制度とその階層制に基づく人間関係について確固たる理念を持っており、その理念が彼らのそれぞれの時点でのありようを測る基準となっていた。これに対し、後期の歴史劇では、彼らが表だつてそのことを認めるかどうかは別にして、階層制度とそれに基づく人間関係は核心においてすでに破綻しており、自分と自分をとり巻く周囲の世界とのあいだに何らかの関係を築いていく上で、そういった制度に依拠することなどはやありえないというのは、すべての人間にとつていわば共通の認識となつているのである。それゆえ、彼らはみな、それぞれ自分なりのやり方で、周囲の世界に対して従来の理念とは違つた何らかの意味または枠組みを投影して、世界を把握し制御しようとする。無残に失敗する者もあれば、部分的に成功する者もある。しかし、言うまでもなく、世界のありようを十全に把握し、その中に自らをしっかりと位置づけることに完全に成功する者は一人もいない。ここで重要なのは、しかし、単に彼らがその企てに成功するか否かということではなく、むしろ、彼らがどういう意味を世界に向けて投げかけるのかというその内容であり、そして、そうやって意味づけられた世

界と自身とをどのように関連づけ調整してゆくのかというその過程である。これらの劇における内乱は、その意味で、むしろ、そういった調整が繰り返される試行錯誤の場となつていると言えよう。

『リチャード二世』の中で、主人公のリチャードも、彼から政権を奪取して実力で王の座に就くボリンブルック、のちのヘンリー四世も、そして、彼らを取り巻く人々も、それぞれの立場で、前期四部作の背景をなしていた、国王を頂点とする階層社会の理念がすでに空洞化している状況の下で、国王であるとはどういうことなのか、その国王に仕えるとはどういうことなのか、さまざまな角度から掘り下げているように思われる。

もつとも、作品の内容についてのこういった脈絡の理解は、それぞれの劇が扱っている歴史上の事実という観点から見れば、誤つた理解ということになるかもしれない。

例えば、今ではもうほとんど顧みられることもなくなつたが、二〇世紀半ばに歴史主義的なシェイクスピア批評を主導して一時代を画したE・M・テイリヤードは、主著の一つ『シェイクスピアの英国史劇』の中で、『リチャード二世』とそれ以前の歴史劇における儀式や儀礼の要素を区別して、次のように述べている。

「こういった初期の劇では、私たちは、劇のアクションが終わった時に精神が至りつく考えを引き出す根拠として、儀式的な出来事に思いを巡らせるよう仕向けられることはない。しかし、『リ

チャード二世』においては、劇のアクションの重要性も十分に強調されているが、それにもかかわらず、私たちは、さまざまな状況の儀式性そのものに思いを巡らせるよう繰り返し仕向けられる(……)。リチャードはつねに、自分が実際に何をするかということよりも、自分がいかに振る舞うか、自分の振る舞いがそれぞれの状況にいかに適っているかということに気をかけている(……)。私たちは、実際、目的よりも手段の方が重要な世界におり、そういった世界では、ゲームに勝つか負けるかということよりも、ゲームの複雑な規則を厳密に守れるかどうかの方が重要なのだ。手段が精緻を極めていて生のゲームの規則がきわめて念入りに細部に亘って定められていたのは、中世においてだった。『リチャード二世』は、シェイクスピアがその中世の生のありようを描いた絵図である(……)。

この点について、ムーディ・ファイアラスという研究者が、中世における生の様相に関するテイリヤードの見方に異を唱えて、この劇の中では、二つの生の様相が描かれていると主張した。ファイアラスによれば、二つの様相のうちの一つは、戦場での武功と国内の活力と国外での威信に徴づけられたリチャードの父祖たちの治世であり、いま一つは、国内では過剰な儀式と武功の欠如、国外では威信の失墜を特徴とする、リチャード二世による衰弱し活力を失ったイングランドの統治だというのである(……)。

中世そのものについては、特別な知識があるわけでもないので、

とりたてて言うべきこともないが、リチャードの宮廷の過剰な儀式性が逆に彼の統治の機能不全を露わにすると見做している点で、テイリヤードの見方と比べれば、ファイアラスの見解の方が正鵠を得ているようにも思われる。しかし、儀式と武功を区別して両者を対照的に捉えようとするというのは、どこか奇異なように感じられる。扱われている時代の順で言えば後になるが、社会の崩壊についてのシェイクスピアの歴史記述としてはその出発点とも言える『ヘンリー六世・第一部』の中で、英雄的な武人としてのありようを一身に具現していたトールボットは、同時に、儀式の遂行者としても最も成功した存在であった。そこでは、これら二つの様相は互いに分かちがたく結びついていたのである。

それはともかく、テイリヤードもファイアラスも、儀式性という観点から、中世の盛期から末期への移行を直線的に捉えて、その線上に作品を置こうとしているように感じられるが、ここで留意すべき点は、シェイクスピアはこういつた歴史劇の中でいつた一つの時代を表象し表現したのかという問題である。つまり、テイリヤードは、『ヘンリー六世』三部作から『リチャード三世』に至る前期四部作を、中世的な規範や道徳が失われてゆく時代と捉えて、それに対して、『リチャード二世』が描いているのは儀式性が深い意義を帯びていた中世の盛期であると見做しているのである。こういうテイリヤードの見方を批判するファイアラスも、描かれた世界の歴史性の認識ということではテイリヤードと大差なく、より中世的な規範に適ったリチャードの父祖たちの時代の後に、そういった規範が揺

らいで儀式とそれが体现する規範とのあいだに乖離が生じたりチャードの時代があると見ているのである。こういった見方は作品の中に表された史実についての理解としてはそれなりに筋が通っているかもしれないが、しかし、シェイクスピアはこれらの芝居の中でただ史実を忠実に辿っているわけではなく、そこにはつねに執筆するシェイクスピア自身の同時代的な関心、同時代的な問題意識が作用していると見えよう。そういう視点からすると、『リチャード二世』は、初めにも少し触れたように、前期四部作で描かれた時代からそれ以前に遡るといふよりも、むしろ、前期四部作で徹底して表された社会の規範の崩壊や精神的な荒廃の後に来る世界のありよう、人間の精神の姿を探っていると考えられるのである。

先に挙げた二人の批評家とともに『リチャード二世』の儀式的な面を強調しており、実際、劇のアクションには、その冒頭から、彼らの主張を裏書きするような儀式的な場面が数多く見られる。しかし、こういった一連の儀式から浮かび上がってくるものは、むしろ、共同体としての国家の儀式がここではまともに機能していないといふことであり、リチャードが、その重々しい言葉使いと荘重な振る舞いにもかかわらず、実際には王としてこれらの儀式を執り行うことが全く出来ずにいるという実態である。そして、この劇の中で、英雄的な武功という様相と対比されるべきなのは、まさしく、この儀式の遂行の不可能性なのである。

同様のことは、作品の宗教性についても当て嵌まるように思われる。この劇はシェイクスピアの英国史劇全体の中でも、神への言及

—自分のありようを判断し、支援し、その行動の正しさを証明してくれるよう、神に乞い求める言葉—がとりわけ多いように感じられる。そういう面だけ切り離して見ると、作品は確かにあらゆる出来事を神の意志に帰そうとした中世のキリスト教世界をそのまま描いているようにも思えてくる。しかし、少し仔細に検討すると、そういった発言は、それを口にする人々の神への深い帰依を表している—と単純には言い切れない部分も少なくない。宗教改革は、一面として地上の出来事を全て人々の営為に帰そうとしたヒューマニズムの運動の後に—あるいは、ルネサンスの運動が大陸より遅れて始まったイングランドでは、それと雁行する形で—改めてその地上の出来事に働く神の業に目を向けようとするものだったと言えようが、改めて言うまでもなく、そこではただ単に全てを神の御心に委ねればそれでいいとされたわけではない。むしろ、多くは地上の力の交錯や葛藤として説明のつく世界にあつて、なおもそこに神の業を見るとすれば、そう考える根拠はいつたい何なのか、それがより深いレベルで問われることになるのである。そして、この『リチャード二世』でも、先に述べたように、描かれているのは—四世紀後半、まさしく中世の世界であるが、それを劇にしているシェイクスピアを動かしているのは、一六世紀末の世界のありようであり、一六世紀末の社会の状況、あるべき信仰の姿だった。

しかし、何はともあれ結論を急ぐ前に、私たちはもっと仔細にテクストを検討してゆかなければなるまい。

先の二人の批評家が他の論者とともに強調しているように、劇の冒頭の場面で私たちを強く印象づけるものは、舞台全体を覆う壮重で厳肅な雰囲気であり、それは、そこで提示される問題——二人の有力な貴族が王の面前で互いに相手を謀反という大罪で告発するという事態——にかにも似つかわしいものと感じられる。人物たちの言葉もまた、それぞれの立場・身分の違いを強調しており、こちらも状況にふさわしいものとなっている。リチャードは、王の尊厳を強調した「君主の複数形」(royal plural)をあくまで使い通そうとし、ノーフォーク公モウブレイとヘンリー・ボリンブルックの二人も、王に対していかに礼を尽くすか互いに張り合っているようにすら見える。三人ともは非常に釣り合いが取れて威厳のある、修辭的にも精緻な言い廻しを駆使している。

けれども、この莊重な言い回しと、王と家臣それぞれの立場にふさわしく礼節を弁えた振る舞いを通して感じられるのは、そういった言葉や振る舞いにはおよそそぐわなない緊張を孕んだ懸念や不安、抑えがたい反目と憎悪の念である。後に続く場面から受ける印象をこの場面に読み込むことは厳に慎まなければならないが、ここでのリチャードの言葉のいくつからか既に、彼の裡に潜む拭いがたい不安の念とそれをことさらに打ち消そうとする居丈高な調子が伝わってくる。ボリンブルックに対する思いの丈を存分に話すようモウブレイに説いて、彼は言う。

モウブレイ、余の目と耳とはあくまで公平であるぞ。

この男が余の兄弟、いや、余の王座の継承者であったとしても——といっても、実際は余の父の弟の息子にすぎないのだが——、今ここで、この畏れ多い儀仗にかけて、私は誓おう、余の神聖な血に近いということが、

この男の身に何一つ特別な保証を与えることはなく、私のまっすぐな魂の断固とした堅固さを歪ませることもない。モウブレイ、この男は余の臣下であり、その点ではお前も同様だ。恐れることなく、思う存分話すがいい。

(一幕一場一—五—三行—四)

この言葉が、表向きは王の公平で不偏な態度を強調しながら、言外に、ボリンブルックに対して、自分の偏った立場を宣告するとともに、王と家臣の立場の違いを思い知らせて、相手が己の主張に固執するなら王たる自分の不興を買うことになる脅しているのは明らかだろう。もう一方のモウブレイについても、「ノーフォークが自分の取りなしを拒んだことに、王は激怒する」(とまで言い切れるかは少し疑問なように思われるが、ボリンブルックがモウブレイを非難するのを、リチャードが自分に向けられたものと感じるのはごく自然なように思われ、それゆえ、モウブレイが王の立場を顧みることもなく、あくまで和解するのを拒みつつけることに、彼が気分を害するというのは、十分あり得ることである。この場面の最後に、二人に槍試合を命じて、リチャードは居丈高な調子で、

余は、人に願うようにはなく、命じるように生まれついでいる。

その余がお前たちに和解するよう命じても、聞かれないなら、お前たちの命でそれに応えてもらうしかあるまい。

聖ランバートの縁日にコベントリで立ち合う準備をするがいい

(二幕一場一九六―九九行)

と言うが、彼がここで、家臣が自分の王としての權威を暗黙の裡に否認しようとすることに、神經質に苛立っているのは明らかだろう。先に断つたように、こういった徴候はすぐに表面化するわけではなく、その意味が完全に明確になるには以後の場面を待たねばならない。けれどもなお、この冒頭の場面からすでに感じられる微妙に緊張を孕んだ雰囲気は、劇全体の意味をどう解するべきかを示す鍵として私たちの注意を不断に引いて、陰に陽にそれを方向づけてゆくことになる。

そして、この不安・懸念を裏書きするかのように、次の場面で描かれる光景は、リチャードが冒頭で装っていた公正で不偏な君主というポーズを真つ向から否認するものである。ボリンブルックによるモウブレイ弾劾の核心は、言うまでもなく、グロスター公殺害にあったのだが、ここでは、その咎は全面的に王が負うべきものとされているのである。

ゴント

神の代理、

神の御前で聖別された神の代理が、

弟の死を招いたのだ。

(二幕二場三七―三九行)

この言葉について印象深いのは、それを通してグロスターの殺害にリチャードが加担していることを明らかにすることよりも、ゴントもグロスター公爵夫人も、そしておそらくは他の人々も、そのことを、改めて問うまでもない当然の前提としているという点だろう。こうして、冒頭の場面におけるリチャードの振る舞いや言葉の裏に潜んでいると先に述べたような意味合いが、ここでははるかに鮮明に浮かび上がってくる。それはあくまで王の一面というにすぎないかもしれないが、彼の性格の裡に潜むこういった卑しく正義に悖る面は、私たちがリチャードとその振る舞いを判断するための重要な手がかりとなつてゆく。

けれども、言うまでもなく、この場面は、王に対するこういった見方を示すためにだけ置かれているわけではない。エリザベス朝の人々にとつて、容易に答えの見つけられない難問の一つに、暴君や無能の君主にあくまで忠義を尽くすのか、あるいは、暴君に反旗を翻してその悪政を糾すのか、いずれが正しいのかということがあつたとされている⁽¹⁾。現実の世界でも、エリザベスのいつそうの老いと腹心の重臣たちの相継ぐ死去のために政権が機能不全の様相を呈する中で、緊急の度を増していたこの問題を背景として用いることで、シェイクスピアは、この劇の中で、政治的、道徳的に不透明な世界に置かれた人々の葛藤や苦悩を探究しようとしている。確か

に、こういった苦しみは、『ヘンリー六世』三部作以来、つねにシェイクスピアの主たる関心事の一つだった。けれども、初めにも触れたように、初期の歴史劇では、政治的な混乱に翻弄される人々は、それでもなお、折に触れて背後を振り返って、階層的な社会秩序という古い理念に目を向けることで、ひとまずそこに心の拠り所となるものを得ることが出来ていた。しかし、すさまじい政争と混乱を通してそういった理念が完全に潰え去った世界を生きる後期歴史劇の登場人物たちには、そもその初めからそういった理念に依拠するという道は閉ざされている。かつて社会のそれぞれの成員に居場所と果たすべき役割と、それゆえそのアイデンティティを与えているように思われた階層制は、ここでは、一方的に王への絶対的な忠誠を強要し、その王が犯すいかなる誤りも正す方途を奪い、彼らの安寧と社会の道理を破壊するようにのみ作用するのである。報復を求め公爵夫人の切々とした訴えに、ゴントはただ、臣下の側にはそうする力がないことを繰り返し説いて、最終的な裁きを天に委ねるようにとむなしく論ずることしか出来ない。

それを正す権能は、私たちには正すことの出来ない
誤りを犯した者の手中にあるのだから、
言い分は天の御心に委ねるのだ。

神は地上の機が熟したのをご覧になれば、
罪を犯した者らの頭上に熱い報いを降らされるだろう。

(一幕二場四八行)

ゴント 報復は天に任すのだ。神の代理たる者に
怒りの腕を振り上げることなど、私にはけつして出来ないのだから。

公爵夫人 では、私はいついどこに自分の不満を訴えればよい
のでしよう。

ゴント 神にだ。つねに夫を失った女を支えて護ってください
のだから。

(四〇―四三行)

こういった作品では宗教というのはつねに微妙な問題だが、先にも触れたように、私たちがここで受ける印象としては、ゴントの言葉が表しているのは、神に対する深い帰依というより、地上で政治的な公正を実現することに對する彼の深い絶望の念である。事実、彼の助言が公爵夫人に何らかの慰撫や安心を与えるということは全くなく、ただいっそう深い失意へと夫人を追いやるのみである。

頼るべきすべもなく、私は一人行って、死ぬしかありません。
(七三行)

こうして、私たちは、王の悪政に對する人々の悲嘆と憤りを通して、一見したところ格調高い儀式性に満ちた王の宮廷をより醒めて距離を置いた感覚で見えていくことになる。そして、ここでのやりと

りに表された、自分たちの存在の拠り所を奪われた人々の絶望感は、劇の要所所で繰り返して表現されて、私たちがリチャードやその周辺に人物たちの言動を判断するための枠組みを提供するとともに、王の悪政に苦しむ人々自身の意識のありようにも私たちの注意を不
断に向けさせていくのである。

次の槍試合の場面は、王が自分が立派に果たしていると見せたい公的な役割と、己の利害だけを気にかける彼の内面とのあいだの乖離をいっそう鮮明に浮かび上がらせる。それまで肅々と進められてきた槍試合を、二人の闘士が必要な手続きを済ませて、いよいよ槍を構えようとした瞬間に、突然中断するよう命じて、リチャードは自分がどうして割って入ったのか、その理由を説いて聞かせる。

余が元老たちとともに決したことを聞くがいい。

余の王国の士が、それが育んだ

大切な血で汚されることなどあつてはならぬし、

隣り合う者の剣でずたずたに切り裂かれた

内乱のすさまじい容貌など見るに堪えぬからな。

(二幕三場一一四—二八行)

それだけで見れば、こういったリチャードの言葉は、国と家臣の身の上を案ずる王の深い慮りの真摯な表現と受け取られることもあるかもしれないし、実際、リチャードがそう取られるよう望んでいるのは明らかである。しかし、彼はそれにさらに言葉を継がずにはお

れないのだが、その言葉は、我が身の安全以外にはほとんど何一つ顧みようとしないう彼の卑劣で臆病な胸の内をはつきり露呈している。

もう一度戻つてこい、そして、誓うのだ。

余の宝剣の上に、追放されるお前たちの手を重ね、

お前たちが神に負う勤め―その勤めのうちで余に対する部分に

ついては

ここでお前たちとともに追放しよう―、その勤めにかけて、

余が指し示す契りを守ると誓うのだ―

誠と神のお導きがあらんことを―追放先で、

互いに睦しく抱擁を交わすようなことはけつしてないとな。

また、互いの顔を見合わせることもあつてはならないし、

な文を送つたり、相まみえたり、国内で育てた

この憎悪の暗い嵐を和陸によつて鎮めることも、

ひそかにもくろんで、余や余の国、

余の臣民や余の土地に、悪事をなすべく、

互いに会つて、企んだり仕組んだりすることもあつてはならぬ。

(二幕三場一七八—九〇行)

ここで、リチャードは、我が身の安全についてはそれだけ気にかけてながら、追放される者たちに対しては何の気遣いも見せない。実際、

執拗な態度で王を苛立たせたということはあつたにしても、実質的にリチャードに代わつてグロスター殺しの責めを一人で負つたモウブレイに対してすら、彼はそれっきり何の配慮も見せることはない。王の唯一の関心事はひたすら我が身の安泰であり、それを護るためには、彼は二人が和解することを――王としてむしろ積極的に説き勧めるべき行為であるはずだが――永久に禁ずることすら辞さないのである。

それでもなお、リチャードは慈悲深い為政者という体裁をあくまで保とうと努めるが、周囲の人々からすれば、彼の治世が、王の特権を振りかざし国政にかかわる重要な事柄をすら責任感もなく恣意的に決めることにあるというのは、議論の余地すらないことである。悲嘆に暮れるゴントの様子を見たリチャードが、いかにも恩着せがましくボリンブルックの追放期間を減じるのに、当のボリンブルックはいかにも屈折した調子で驚いてみせる。

わずか一語の中にどれほどの時間が詰まっていることか。

遅々として進まぬ四度の冬と万物が戯れる四度の春が

只の一語で尽きるのだ。王の言葉とはそういうものか。

(二幕三場、二二二―二二五行)

そこから伝わってくるのは、初めて実感した君主の権限の大きさに對する感嘆の念と、その至上の権限を実際に振るう者の空疎さに対する皮肉を交えた驚愕の思いである。

折に触れて感じられるリチャードの不安自体、自らの裡に広がるこの大きな乖離に對する彼の抑えがたい自意識に帰することが出来る。確かに彼は「こういつた初めの方の場面では、その威厳ある役割を見事に演じている」(七)かもしれないし、「自分の役を楽しんでいる」(八)のかもしれない。しかし、私には彼が単に自分の役割を楽しんで演じているとはとても思われぬ。君主らしい態度と物言いを維持することで、彼はそういつた物々しい外面の下に潜む貧しく空疎な己の内面から懸命に目を逸らそうとしているのである。それゆえにこそ、彼は莊重な物言いにこだわり、あくまで「君主の複數形」を使いつづけるのである。

こういう不安は、彼が輕薄な取り巻きだけに囲まれて、公正な君主のふりをする必要などない時ですら、絶えず彼に迫ってくる。ボリンブルックを追放したことで厄介払いが出来たことを冷やかに喜びながらも、リチャードは、その相手が見せた、自分にはけつして身に着けることの出来ないような、いかにも王者にふさわしい物言いと振る舞いに、苛立ちを抑えることが出来ない。

余とブッシー、それに、このバゴットとグリーンとで

あいつが平民どもの歡心を買うさまを見ていた。

あいつがどんなに謙虚で親しげな素振りそぶで

連中の心の内に飛び込んでいつたかをな。

下衆どもに幾重にも敬意を表し、

巧みな笑みと運命に忍耐強く耐えているという装いとで

みすぼらしい職人たちの心を掴んで、さながら

「奴らの心を追放された異国にいっしよに連れていかんばかりだ。

牡蠣売りの娘に対しては帽子を取って、

荷車引きが「神のご加護があらんことを」と声をかければ、

奴の方も膝を曲げて、「ありがとう、同胞の皆さん、

愛しい友よ」と丁重に礼を返し、そのさまは、

まるで、余のイングランドが次の代には奴のものになることにな

っていて、

奴が余の臣民どもの期待を一身に集めているかのようなだった。

(一 幕四場二二一—二六行)

それゆえにこそ、彼は、逆に、王の特権を極限まで行使することで、

自分が王であることを自らに納得させようとするのである。取り巻

きの一人グリーンが、ポリンブルックの堂々とした物腰に苛立つ王

の心を逸らそうとして、アイルランドへの遠征の話を持ち出すと、

リチャードは自ら軍を率いて遠征に参加するとまで言い出して、そ

の戦費は重税と悪名高い「白紙の寄進状」で調達すると主張する。

さらに、ゴントの重篤な病状が伝えられると、彼は新たな思いつ

きに有頂天になる。

神よ、ゴントをすみやかに墓に送れるよう

医者の方に手筈をお伝えください。

叔父の金庫の内張りを、このアイルランドへの戦役で

兵士たちを飾る外套に変えるのだ。

では、行こう、諸君、皆で病人を見舞うのだ。

願わくば、急いで駆けつけながら、間に合わなかったとならんこ

とを。

(二 幕四場五九—六五行)

王のこういった面は、まず第一に、観客がリチャードのことを正義に悼む為政者で以後の混乱の大本であると見做すように描かれているのは言うまでもない。しかし、ここでのリチャードの浅薄で専横な台詞はどこかわざとらしく、自らの愚行に対する呵責の念を抑えて、慈悲深く勇壮な王という理念を意図的に踏みにつけているかのように聞こえる。リチャードの失政は彼自身の人格に帰されるべきものであつて、その責めは彼が一人を負うしかないのは言うまでもないが、彼の性格的な弱さは、自身で改められる程度を超えている。彼は自分の欠陥がわかつていないのではなく、むしろ、初めから自分の無能さをはつきりと意識しながら、その欠陥を自ら正すことが出来ないのである。そして、彼は、自分がそういう欠陥を正すことが出来ないと感じるがゆえに、よりいっそう狂おしく、外向きには公正な王という空虚な役を演じながら、私欲を満たそうとするという支離滅裂な目的を追求してゆくのである。

このようにして、リチャードは自分なりの心の平安を見出そうと努めるわけだが、そんな願いはもとより叶うべくもない。後で見て

いくように、事態の急変の中で、外的な状況としても、内的な意識としても、彼はどんだん追い詰められてゆくが、こういった辛辣な自意識は、状況の急変の中で突如として湧きあがってくるというものではなく、彼のうちに潜んでいて、彼の心の安定を脅かしつづけているのである。その意味で、リチャードはただ一方的にイングランドに政治的混乱をもたらしたというのではなく、彼もまた、劇の中の他の人物と少し違った意味ではあるが、彼らと同様に、初めから既に破綻を来たしているこの世界にあつて、そこから抜け出す術を持たない犠牲者として条件づけられているのである。

このように、冒頭第一幕の展開をいくぶん詳細に辿つてゆくと、二つのありようが浮かび上がってくる。一方には、いま見たようなリチャードのありようがあり、もう一方には、ゴーントと彼を取り巻く人々の生き方がある。二つの生き方は全く異なっているが、支えとなる中核を欠いているという点では同様なように思われる。リチャードが自分の演じる、絶対的な権力を振るう君主、慈悲深い王という役割を裏から支える強靱な胆力、誠実な思いやりを欠いているように、一切を神の御心に委ねるように説くゴーントの言葉も、背後にあつて、それに説得力を付与する内的確信を感じさせることではない。この二つのありようがそれぞれ劇を通してどのように展開され変質していくのか、次にそれを追つてゆくことにしよう。

ポリンブルックの蜂起を前にして、リチャードは、最初、正統な君主として自分が帯びているはずの神聖さと不可侵性に頼ろうとし、

自然と神に対して自分の側について支援してくれるように懸命に訴える。

優しい大地よ、お前の君主の敵に糧を与えるようなまねはしないでくれ。

そしてまた、お前の甘い果実で、奴の飽くなき空腹を鎮めるようなこともしないでほしい。

そして、お前の毒気を地中から吸い上げる蜘蛛と

のそのそ歩く蠍（かまごとも）とに奴らの進路をふさがせて、

玉座を狙う侵攻でお前を踏みつけにする

その背信の行軍を悩ませるよう仕向けてくれ。

私の敵に向かつて刺すような茨を生じさせくれ。

そして、奴らがお前の胸から花一輪とも摘もうものなら、

陰に潜む毒蛇でそれを護るのだ。

二股のその舌に触れば、すみやかに致命傷となつて、

お前の君主の敵に死をもたらすだろう。

(三幕二場二二二行)

この世の人間が発する声で、神にその代理として選ばれた王を廃することなど出来ようはずがない。余の黄金の冠に向かつて鋭い刃を振りかざすべく、ポリンブルックが募つた兵の一人一人に対して、

神はリチャードのために天の蔵の持ち出しで栄えある天使を遣わしてくださるのだ。そして、天使が戦おうものなら、弱い人間など一溜まりもないわ。神はつねに正しい者をお護りくださるのだからな。

(五六六二行)

自分のことを忘れていた。私は王ではないか。何を怯えているのだ、王たる威厳よ。お前は眠っているのだ。

王という名は二千の名に等しいではないか。

我が名よ、武器を取れ。卑しい臣民が一人

お前の偉大な栄光に打ちかかっているのだぞ。

(八三七八七行)

こうして、リチャードは、自らの王としての神聖さを繰り返し説いてゆくが、しかし、説く度に声高になつていく声の合間からは、ポリンブルックが実質的にも国王を掌握してしまつていゝと徹然たる事実と自身の王としての無能さとに正面から向き合わなければならぬことのへの募りゆく恐怖の念がはつきりと顔を覗かせている。彼は周りの人々に、自分が自然に対して「聞かれることもなく (senseless) 訴えをする」(三幕二場二三行) のを軽蔑しないでくれと言うが、彼自身、その甲斐のなさを十分知りながら、そのことを認めようとしただけである。(一一)で彼が "senseless" と

いう言葉を使うのはいかにも興味深い。第一義的には、その訴えが "senseless" なのは、「彼が一般に感覚がないとされているものに話しかけているから」(五) かもしれないが、しかし、リチャードのこの言葉は一瞬、それが別の意味で "senseless" である、「知性に欠ける、間が抜けている、愚かしい、馬鹿げている」(O. E. D. adj. 8) という彼自身の自意識を露呈している。(彼が自分の名に必死に訴える最後の引用は、明らかに、その名に何の実体も与えることの出来ない自分の非力さに対する自嘲の念に晒され、ほとんど圧倒されている。自身とその周囲の人々を励まそうとする時も、彼が当てるのは、時には超自然の力だったり、時には忠実なはずの臣民の加勢だったりするが、つねに自分以外のものである。周囲の人々が懸命に説いて聞かせても、彼が自分—自分の武力、自分の勇氣—を頼むことは最後までない。

リチャードのような性格の人間にとつて、決着のつかない戦争のように不安定でどつちつかずの状況に長くどどまるといふのは、どだい無理な話である。それゆえ、自分たちの側に不利な状況を聞かされると、彼はすぐに一切を投げ出して、その惨めな状態の中に新たな心の平安を見出そうとする。

後生だから、地べたに座つて、

王たちの死にまつわる悲しい物語をしようではないか。

・ ・ ・ ・ ・

帽子を脱ぐ必要などないぞ、ただの人間に仰々しい挨拶などして

からかわんでくれ。敬意も、伝統も、

作法も、儀式の格式も、みな投げ捨てるのだ。

お前たちはこの間ずっと勘違いしていたのだからな。

お前たちと同じように、わしもパンで命をつなぎ、なければひも

じい思いをし、

悲しければ涙して、女を必要とする——こんなに弱いありさまなの
に、

どうしてお前たちはわしに言えるのだ、このわしが王だなどと。

(二幕・場・五五七行)

失脚した君主が吐露する抒情的な詠嘆としてそれなりに心を打つと
言えるかもしれないが、ここには、王たる者のあり方についてのリ
チャードの新たな洞察といったものは何一つ感じられない。それが
示しているのはただ、リチャードが初めから持っていた、王につい
ての二つの見方のうち、それまで彼が懸命に示そうとしてきた、絶
対的な支配権を帯びた君主という一方の見方から、彼がそれまで正
視するのを拒んできた、ありふれたただの人間というもう一つの見
方へと、その強調を移しただけのことである。前者に固執していた
時も彼はそこに安心を見出すことが出来ずにいたが、同様に、生身
の人間としての己の弱さを嘆く彼のここでの物言いも、不自然に誇
張されて芝居がかつており、状況に適切に対応できない己の無能さ
に対する不安に満ちた自意識を露呈している。彼はここで他の王た
ちの没落を口にして、そのことを彼は以後何度も繰り返すことにな

るのだが、その語りが暗示するのは、そういったほかの没落した王
に自らを同化させて、この一般化・同一化を通して、自身が置かれ
た現在の状況から目を逸らし、そういった状況を招いた自らの責任
を回避しようとするリチャードの心の動きである。彼がかつて正し
い王、絶対的な君主といった役を懸命に演じていたように、ここで
も、彼は没落した王という役を演ずることに没頭してしまうのであ
る。

王は、悲嘆の虜となっても、王らしく悲嘆に従おう。

(三幕二場二一〇行)

この新しい役割と同一化することによって、リチャードは自分と周
囲の世界とのあいだに改めて一つの関係を築いて、そうすること、
自分の心の平衡を取り戻そうとする。けれども、以前の役割が本質
的に彼の内的現実から遠く隔たっていたのと同様に、新しい役割も
この困難な課題に対して真摯に応えるものではない。それはただ、
自分の内面と外的世界という二つの現実のどちらともまともに向き
合うことの出来ない人間に、一時的な逃避の場を提供する、間に合わ
せの方便でしかない。

それゆえ、この劇のアクションの展開には、単に一つの役からも
う一つの役へといった直線的な移行は見られない。リチャードはこ
の二つを含めていくつもの役割——天によってその座を保証された神
聖な王、慈悲深い君主、その実態を暴かれて退位するかあるいは廃

位される暴君、政治の世界の殉教者、皮肉な批評家、妻と引き裂かれる夫（こ）、老婆の涙を誘う哀れな悲話の主人公など、さまざまな役割のあいだで揺れ動く、というより、むしろ、小突きまわされる。そういった役割のいずれにもある時は非情な外部の力のゆえに、ある時はまたそういう役を演じているこの愚かしさについての自覚のゆえに―彼は長くどどまることが出来ない。ノーサンバーランドは、リチャードの専制的な面だけを強調することで政変を正当化しようとするが、それと同様に、リチャードも自分の好きな役に自らを同化することで心の安らぎを得ようとする。けれども、今も述べたように、ノーサンバーランドに代表されるような外部の力に加えて、自らの愚かさを正視するよう迫る病的に冴えた自覚の念が激しく彼を責め立て、リチャードが潜り込もうと望むいかなる逃避の場からも絶え間なく彼を追い立ててゆく。

リチャードが最後に姿を現すのは、幽閉されたホンフレット城の土牢である。訪れる者もなく、もう誰に悩ませることもなく、没落した君主であれ、他の何であれ、自分の好きな役を存分に演じられるはずなのだが、その時ですら、リチャードの意識は彼を執拗に追いたててくる。むしろ、いっそう激しい勢いで彼を責め立て、懸命に役割を演じることで気を紛らわせようとする彼の努力を無に帰してゆく。

おれは、自分がいま住んでいるこの牢獄を

どうすれば世界に喩えられるか思案してきた。

でも世界には人があふれているのに

ここにはおれ以外に誰もいないから、

喩えようがない。が、とにかく、無理を承知でやってみよう。

・ ・ ・ ・ ・

自足しようとする思いは、己をおだてて、

運勢に踏みつぶされたのは自分たちが初めてというわけではな

く、

最後ということもないだろうと説き聞かせる。見せしめに

足枷をはめたまま捨ておかれた愚かな乞食が、今までからもこれ

からも

ここに座る者は多くいるということで、恥辱を避けるのと同じ

だ。

そして、そう考えることで、連中は、同様の辛酸に耐えてきた者

らの

背中に自身の不幸を背負わせて、幾ばくかの慰めを見出すのだ。

こうやって俺は自分一人で多くの人物を演じるが、その誰一人と

して

満足する者はない。時には俺は王なのだが、

謀反のために乞食の方がよかったという気になり、

そして実際乞食の身だ。それからまた、身をすり潰すような困窮

が

王の方がよかったという気にさせる。

それでまた下に戻されるのだが、すぐにまた、ポリンブルックに王の座を追われたのだと考えて、

即座に何でもなしになってしまう。だが、おれが何であろうと、おれでも、ただの人にはすぎない誰であつても、

自身が何でもなしになつて気が楽になるまで、何にも満足できることはないだろう。

(五幕五場・一四一行)

自身を包む世界とのあいだにいかなる関係を結ぶ手立ても奪われて、リチャードは、自分が試すどんな役も即座に退ける鋭い自意識と真つ向から向き合うよう迫られる。「運勢に踏みつぶされた」多くの者たちと同化しようとして、彼は自分がただそうやって自身を欺いているだけだと痛感する。王としてのかつての自らの威容を思い起こした途端に、へでは廃位された王なのだという実感が迫ってくる。自分を「何でもなし」に喩えながら、彼は自分が「何でもなし」などでは決してなく、生きている限り決して満たされることがないという以外、一切の定義を欠いた「何ものか」であるということをも十分に自覚している。これまでリチャードは自分と向き合うことをあらゆる手段を講じて避けてきた。そうするための一切の手立てを奪われた今、自己定義と即座の否定という際限のない反復を通して、彼は貧しく惨めな己の姿を見つづけるよう迫られるのである。

ほとんど狂気に接するこの孤独な省察の渦の中で、リチャードが

死を迎える時、それゆえ、その死は何ら新しい展望を開くものではなく、死を通して彼の人生に新たな意義が付与されるようなこともない。王としての自らをもう一度主張する彼の今際の言葉いよわですら、やはり懐疑に晒されたままであり、深い内的確信を感じさせるようなものではない。

おれの身体をよろめかせるその手は、永劫に消えない

炎で焼かれるだろう。エクストン、おまえのおぞましい手は、

王の血でその王の大地を汚してしまったのだ。

さあ、行け、我が魂よ。その重い肉体がここで果てんと

沈んでいくあいだに、お前の座が待つ天へ昇つてゆくのだ。

(五幕五場・〇八一・二行)

これもまた、彼の役割の一つ――死を前にして崩れようとする姿勢をかりうじて保つための自己定義―なのかもしれない。実際、その言葉の内容は、ポリンブルックの蜂起の報せに接して、彼が次々と役を演じてみせた際のものと同質的に何ら変わるものではない。

にもかかわらず、この狂おしい独白―というよりむしろ、引き裂かれた自己を舞台上に繰り広げられる、自己定義と自己認識とのあいだの熾烈な闘い―の中に、私たちは、リチャードが自らの政治的な失脚を通して何かを学んだというかすかな徴候を見て取ることが出来るのではないだろうか。強いられた結果とはいえ、彼が自分と正

面から向き合うこと自体、リチャードが最後に得た一種の勇氣を示唆しているとも言えよう。さらに、そうやって己と向き合うことで、彼は自分の影―自分の輝かしい外面のうちに潜む空虚さについての迫りくる認識―に追いつてられるという恐怖から解放される。言い換えれば、自己定義とその無効化の反復という過程そのものの空しさを明確に意識化することで、彼はこのひたすら消耗するだけの閉ざされたサイクルを乗り越えようという努力をわずかなりとも示すのである。

奏でられる音楽に背立つた後に、彼が、ほとんど何の衒いもなく、自分の過去の過ちを認める時、その言葉はこれまでにない穏やかで誠実な調子を帯びるようになっていく。

ここでおれは弦の調律が整わなくて、

リズムの狂った音楽を聞き咎めるほど繊細な耳をしながら、

おれの立場と時代の調和については、

自分の真の調子が狂っているのを聞き咎める耳がなかった。

おれは時を無にして、今では時が俺を無に帰すのだ。

(五幕五場四五―四九行)

そして、彼が次のように楽士に謝意を表す時、

でも、これを聞かせてくれた者の心に神の祝福があらんことを、
愛の徴だからな。そして、リチャードに対する愛は、

皆が憎しみを向けてくるこの世界では、希有な徴だからな、

(六四―六六行)

その謙虚さは、彼がボリンブルックと対峙していた際に見せた、芝居がかって誇張され、本質的に自己中心的な恭謙さとは異なつて、リチャードの中に、王として、そして同時にまた、普通の人間として、何らかの覚醒があったことを示唆しているとも感じられる。

けれども、結局のところ、リチャードについては、芝居はここで終わっている。彼が最期の瞬間に新しくより深い洞察に達したとしても、それはかすかな徴候として暗示されているにすぎない。そして、そういう暗示は、より説得力のあるものとなる前に、暗殺者の手で無造作に遮られ断たれることになる。リチャードの死に何らかの厳肅さが付与されるようなこともなく、観客が彼の死を特別に意義のあるものと見做すことが出来るような明確な展望を与えられることもない。

先に触れたように、グロスター公爵夫人がゴントに苦しい胸中を訴えて諭される場面(一幕二場)は、国王に忠誠を尽くして階層化された社会の中に自らをしっかりと位置づけようという思いと、王の圧政を糾弾して階層社会の不備を訴えようとする思いとに引き裂かれた人々の苦悩という、劇の中でさまざまな変奏を伴いながら繰り返されるテーマの序章となっていた。行動を慎むように王を諫めるゴントの真摯な訓戒は、最後まで何の結果も生むことはなく、

相手の苛立ちを招くだけである。王の行いを改めさせて、その統治を正そうとする自らの努力の甲斐のなさを痛感して、ゴーントは悲しみに押しひしがれて、空しくリチャードのことを呪いながら、舞台から消えてゆく。

わしを悩ます目下の病と力を合わせて、

お前のその冷たい仕打ちが命取りとなつて

とうに萎れた花を摘んでしまうこととなろう。

恥にまみれて生きるがいい、だがその恥はお前の死後も生き続けるのだ。

この言葉が、これ以降、お前を苦しめる拷問となるように。

(二幕一場一三二―一三六行)

この呪詛の言葉は、皮肉にもそのまま実現されてゆくことになるが、観客や読者が、あとでこの呪詛を思い起こして、リチャードの転落を、ゴーントがグロスター公爵夫人を論じて、「神は地上の機が熟すのをご覧になれば、ノ罪を犯した者らの頭上に熱い報いを下されるだろう」と語つたように、神が罰を下された結果と取るかとなると、答えはそれほど簡明ではない。

実際、リチャード自身、イングランド北方ポントフレット城への配流が決まった自分を執拗に苛むノーサンバーランドに対して、

ノーサンバーランドよ、野心に燃えるポリンブルックが

わしの王座に昇るために架けたはしこの身で、
その醜い罪の波頭が、勢い余つて、

砕け散る日もさほど遠くはあるまいに。いずれお前は、

あの男が国土を二つに割つて、その片割れをくれたとしても、

奴が全部を得るのを助けたのだから、これでは少なすぎると思う

ようになるだろう。

そして、ポリンブルックの方も、お前が、不正な王を

据えつける手立てを知つたからには、かけらほどのきつかけさえ

あれば、

奴をその篡奪した王座から根こそぎにして、

真つ逆さまに突き落とす算段をすと思うだろう

(五幕一場五五―五六五行)

と語っているが、史実に詳しい者なら、それがそのまま現実になつていくことを思い起こしたかもしれないし、シェイクスピア自身、次の『ヘンリー四世』二部作の中で、ノーサンバーランドがヘンリー四世への反乱を主導しながら、背信を繰り返して仲間を見殺しにした挙げ句に、自身はスコットランドに逃亡するさまを描いている。しかし、だからといって、それが、この予言に託されたリチャードの呪いが聞き届けられて、神がノーサンバーランドに罰を下された結果だと感じる観客がそれほど多くいたとは思えない。

二つの例とも、事態はあくまで地上の力の行使と交錯の結果として推移していくように思われる。その意味で、これら二つの呪詛も、

ポリンブルックの蜂起を前にして、神や自然の助力を乞い願うリチャードの訴えと同様に、自ら事態を変えてゆく力を欠いた人間の練り言という範圍を大きく超えているようには見えない。

いずれにせよ、こうして、ゴーントの言葉は、リチャードに対する諫言にしても、その諫言が聞き届けられなかったことから来るリチャードへの呪詛にしても、それ自体としては何の効果も生むことはなく、息子のポリンブルックも追放されたゴーントは、失意のうちに亡くなり、聞く耳を持たないリチャードをそれでも諫めつづけるという不毛な役割は、もう一人の叔父ケント公に引き継がれてゆく。

その役割を受け継ぐのに、ヨークはリチャードに対する長い譴責から始めるが、その言葉は、彼自身、リチャードを論せる人間がもう自分以外には誰も残っておらず、その自分の譴責もリチャードの耳には届かないということを悟っているがゆえに、いつそう激しいものとなっている。

いったいいつまでわしは我慢しなければならぬのだ。ああ、い
つまで

従順な義務の念から悪行に耐えねばならぬのか。

(二幕一場一六三六四行)

彼は、リチャードによるゴーントの領地の没収やそれまで認められていた権利の剥奪を、階層的な社会秩序の理念を決定的に破綻させ

る行為と見做して、この点でも王を厳しく叱正する。

ハーフォードの権利を奪って、父祖の代から受け継いだ

特許も、慣例として認められてきた権利も奪うというなら、

今日の次には明日が来るのもやめにして、

お前であることもやめるがいい。順序を守って代々継がれる

世襲もなしに、どうしてお前が王でなどいられようか。

(二幕一場一九五九行)

それでも、彼は、古い階層制度によって家臣に課された忠誠の枠を踏み超えることは出来ず、王のことを完全に自然に背いてその座にふさわしからぬ者と呼びかけながら、途中で白ら口をつぐんでしまう。

ヨーク ああ、リチャード、ヨークは悲しみに狂わんばかりだ、
さもなければ、どうしてお前のことなど……。

リチャード おや、叔父上、どうされたのです。

ヨーク ああ、陛下。

どうかお赦しを。もつとも、赦せないというのですら、

それでもけつこうですが。赦されなくとも本望です。

(二幕一場一八四一八行)

こうして、ヨークの心は、リチャードを面と向かって痛罵し、その

非を正さねばならないという思いと、それでもなお、神によって聖別された王に忠義・忠誠を尽くさなければならぬという思いとの両極のあいだで、終始揺れつづける。

しかし、そのヨークも、ボリンブルックの蜂起という具体的な状況を前にして、リチャードへの忠誠とボリンブルックへの共感とに引き裂かれる自らと正面から向き合せて、両者のあいだに何らかの折り合いをつけるか、さもなければ、明確にどちらかの側に付くよう迫られる。

こんなふうには

めちやくちやな形で押しつけられた物事を

どうやって、どちらの方向に整えていけばよいかなど

わしにわかるう筈もない。どちらもわしの身内だ。

一方はお仕える陛下でもあり、誓いと義務の

両方がお護りするよう命じている。もう一方もまた、

わしの身内で、これに王が悪事を働いたのだ。

それについては、良心と近親の情が正すよう求めている

はてさて、とにかく何かしなければな

(二幕二場一〇八一―一〇八六行)

けれども、実際には彼はこのデイレンマを自ら解決するようなことを何一つ出来ず、この場面以降の彼の態度はつねに曖昧で、その敵しい言葉が表向きは断固とした態度を示している時ですら、どっち

つかずの調子を帯びるか、続く言葉によって容易に撤回されるかして、引き裂かれて決断のつかない内面を露呈している。彼はボリンブルックを叱正して、その咎は「考えられる限り最悪のもので、弁明の余地のない叛逆であり、忌むべき謀反だ」(二幕三場、〇八九行)と言いながら、そのすぐ後にさしたるためらいを見せることもなく、実質的に彼の側に寝返ってしまう。口では「国の法」の側につくと言いつつながら、実際には、彼はボリンブルックの蜂起の正否について相手ときちんと議論することも、自分が取るべき態度についてまともに考慮することも避けて、物事が自然の勢いで進んでいくのに任せてしまうのである。

はてさて、戦いに臨んだところで結果は見えている。

正直なところ、わしにはどうしようもない。

手持ちの部隊などしれていて、ろくに武器も残っていない。

けれども、命を授けてくださった神にかけて、出来るものなら、

お前たちを全員捕らえて、国王陛下の

畏れ多い慈悲にひれ伏させるのだが。

しかし、出来ない以上、ここに知らせておこう、

この件では、わしはあくまで中立を通すつもりだ……。

自分ではどうすることも出来ない以上、思い煩うこともあるまい。

(二幕三場一五・一七―一七一行)

リチャードがイングランドを留守にしているあいだ摂政の座にある以上、自分の「中立」がリチャードにとって命取りとなることをヨークが分らないはずがない。それゆえ、彼が自分が動こうとしな
いのを自分の率いる軍の弱さの所為せいにして、それ以上問題の核心を

掘り下げようとしないうのは、端はたから見れば責任の放棄以外の何物でもない。自分の責任を外的な事情に帰することで、ヨークは自分を欺たぶらかしているとすら見える。

そのように言うからといって、私は、批評家が時に主張するように、彼が決定的にポリンブルックの側について、王の廃位のための手続きでも積極的な役割を果たしたなどと考えているわけではない（一）。確かに、ヨークは廃位の場面で推進役のように振る舞ってはいるが、しかし、そこで彼が果たしているのは、すでに筋書きが決まっ
ていて今さら大きく変わることはない事態の単なる進行役にすぎないように見える。むしろ、その時まで、彼は、ポリンブルックとその仲間たちの行きすぎた振る舞いを押しとどめようとし、リチャードが王としてのその美しい外面をはがされるのを嘆なげいてもいた。それでもなお、彼の態度は最後まで曖昧なままで、そこには断固とした一貫性、志操の堅さといったものは微塵も感じられない。彼の訓戒と嘆きは、表向きの激しさとは裏腹に、いつも諦念を漂もよほわせているように聞こえる。リチャードの置かれた窮状に深い遺憾の意を表した後で、彼はこのクーデターを神の意志に帰する。

しかし、これらの出来事には神が手を貸されたのだ。
その高い御心には、私たちは穏やかな心で従うしかない。
今では私たちはポリンブルックに臣下として仕えることを誓ちかっている。

その誉れ高い御位みくらひをずっと変わりなくお支えしなければな。

（五幕二場三七四〇行）

一幕二場でゴーンントが神の意志について述べた言葉が、神への深い信頼を表しているというよりは、むしろ、地上の政治に対する彼の絶望感を示していたように、ここでのヨークの言葉も、篤い敬神の情の表れというよりも、政変の正当性について深く考えることを回避した結果と感じられ、彼の言う「穏やかな心」が、もし彼にありうるとすれば、彼はそれを、自らの責任から目を逸らすことで得ているのである。

未遂に終わったオーマールらの謀反の企てが、思わぬ形で、ヨークのうちに「穏やかな心」など実際にはないということを露呈する。この出来事は「彼の新しい政治的忠誠を試す即座の好機」（二）であるかもしれないが、彼が、自分の忠誠心を証明しようとして、妻の懇願を振り切つて息子たちの企みを王に注進し、加担した者たち全員（三）の即刻の処刑を進言する、そのあまりに迅速で厳格な対応は、ポリンブルックの蜂起の際の彼の優柔不断な態度と比べると、ある意

味衝撃的でかなり不快ですらある。

こんなふうには

めちやくちやな形で押しつけられた物事を

どうやって、どちらの方向に整えていけばよいかなど

わしに分かるう筈もない。どちらもわしの身内だ。

一方はお仕える陛下でもあり、誓いと義務の

両方がお護りするよう命じている。もう一方もまた、

わしの身内で……。

しかし、それをいうなら、息子のオーマールもまた立派に彼の身内ではないか。ここでヨークは国の大義に完全に同化して、そうすることで、かつての曖昧な対応で失った自らの志操の堅さを何としても取り戻そうとする。しかし、そうすることで、彼は自分の息子に対して抱く自然な感情から目を背けなければならず、その意味で、志操の堅さや心の穏やかさを回復させることなど彼にはもはや望むべくもなくなってしまう。彼のデイレンマは、ここでは、ポリンブルック変わってヘンリー四世がヨーク公爵夫人の訴えを容れてオーマールを赦したことで、一時的に解消されるが、そのことに對するヨークの沈黙は、彼の内面の癒やしがない亀裂と混乱を示唆しているように思われる。

かつてリチャードが、公正な王、絶対的な君主という何の裏付けもない役を演じることで、自分の内的な空虚さを正視するのを避け

ようとしたように、ヨークもまた、地上の出来事をすべて神の意志に帰すか、忠誠を尽くす家臣というもう取り戻しようのない役にすることがよって、自身の内面の混乱から目を逸らそうとするのである。彼が演じてみせる役割はリチャードの場合のように悲惨な事態に繋がることはないが、この劇を通して彼が何らかの形で「穏やかな心」を得ることが出来ようなどとはとても見えない。

ポリンブルックの人物像についてはほかの脈絡で論じたことがあるので、ここで深く立ち入ることはないが、リチャードとヨークについて見たような心の安らぎの欠如は、本質的に彼についても当てはまるのではないだろうか。たしかに彼は政治的な覇権を掌握するが、そのことは、彼が自身を包む世界とのあいだに十分に満足していく関係を築けたということの意味するものではない。この作品の中でポリンブルックは自分の内面を晒すことがほとんどない以上、この劇に描かれた出来事の脈絡だけで、彼のことを決定的に判断するのはあまりに性急だろう。むしろ、ここでは彼は、リチャードの無能さ、王としての不適格さを浮かび上がらせる対照例という面が強調されているように思われる。彼は実際にリチャードの廢位に向けて積極的に動いていたのかもしれないが、舞台上のポリンブルックは、リチャードに退位を直接強要するようなことを何もしていない。リチャードは敵の政治的圧力に圧倒されたと言えるかもしれないが、それよりもむしろ、彼は、自分に統治能力が欠けていることに対する自意識と、宙ぶらりんの状態に留め置かれることへの耐え

がたきゆえに、自ら政治的失脚に向けて駆り立てられていくように思われる。その意味で、ポリンブルックは、リチャードを追い立てる「政治的必然」の具現以上のものとしては劇化されておらず、それですら、リチャードの破滅をもたらす要因の一つという域を超えていないのである。

にもかかわらず、劇の最後の場面は、一瞬、彼の内面の亀裂と深い呵責を露呈しており、それはこれに続く作品の中で最後まで彼を追い続けることになる。

毒を必要とする人間が、だからといって、毒を愛するわけではない。
い。

わしと同様だ。リチャードに死んでほしいと願ってはいたが、手を下した者を憎く思うし、殺されたリチャードは愛おしい。

労苦の報いに、良心の呵責を得るがいい。

だが、わしから労いの言葉を受けたり、目をかけられたりすると
思うな。

諸君、どうか、信じてほしい。私を盛りたてるために
血が注がれたということでは、悲しい思いで一杯だ。

さあ、私が悲しんでいることに、一緒に泣いて、
すみやかに黒い喪服をまとうてくれ。

自分の罪深い手からこの血を洗い流すために、
私は聖地への旅に出るつもりだ。

これが彼の心からの悔悟の表明なのか、それとも貴族たちの心を静めるための単なる身振りなのか、これだけでは何とも判断のしようがない(後に続く芝居をヒントに、その真意を斟酌するなら、「聖地への旅に出る」という彼の――最後まで果たされることのない――目論見は、亡きリチャードの冥福を祈るためというより、むしろ、自身の就位にまつわる暗部から人々の目を逸らそうという政治的な意図に基づいている『ヘンリー四世・第二部』四幕五場：〇八一―二行)。いずれにしても、そこには、ヘンリーの癒やしがたい呵責と心労が顔を覗かせている。

こうして、この劇では、要所要所で、人物たちは神に祈願し、この次第を神の意志に委ねるなど、しばしば神を引き合いに出す。ゴントはグロスター公爵夫人にその夫の非業の死の報復を神の御心に委ねるように説き、また、臨終の床では、リチャードを呪って、王が引き起こした恥辱が王自身の上に降りかかるよう願う。そこでは直接神への言及はないが、その希求が神への訴えであることは脈絡から明らかだろう。一方、そのリチャードは、ポリンブルックの蜂起を受けて、王として聖別された自らに力を貸すよう神や自然に訴え、廃位されてボンフレット城に移送される際には、自分を苛むノーサンバランドが呪われるよう祈ってみせる。ヨークは、ポリンブルックの蜂起の帰趨を神の意志によるものとするので、穏や

かな心でおれると語る。そして、ヘンリー四世は、自身の就位とリチャードの死にまつわる自身の罪を贖うためにエルサレムへ十字軍を率いて出征するという計画を口にする。

けれども、これまで見てきたように、神がこういった呼びかけや訴えに耳を傾けて、地上の出来事に直接介入したり人の願いを聞き入れたりしたという印象を観客や読者が得るとはとても思われぬ。グロスター公爵夫人に対するゴントの説諭は地上での正義に実現に対する彼の絶望の念の表明としか聞こえず、神と自然に援軍を要請するリチャードの訴えは何の反応も引き出すことなく、自分では何一つ出来ない己の非力さに対する自嘲の念に晒されている。政權の移譲が終わった後でヨークが語る、「これらの出来事には神が手を貸された」のだから、自分たちは穏やかな心でそれに従うしかないという言葉は、リチャードの留守を預かる身でありながら何一つ有効な手立てを取ろうとしなかつた己の無責任さを自らに隠蔽しようとするものとしか聞こえないし、以後の展開は彼のうちにそういった穏やかな心など元より存在していないことをはしなくも露呈してしまう。贖罪のためにエルサレムに遠征しようというヘンリー四世の意図がどの程度真摯なものかは詳らかではなく、のちになって、その真の目的は自分の就位にまつわる暗部から人の目を逸らすことにあることが明らかになる。ゴントの呪いやリチャードの予言のように、のちにその通りになることが進行してゆくものですら、そこに神の業が働いているような印象がないのも先に見たとおりである。それらはすべて人と人との交渉を通して展開されていっており、直

接神の意志の介入を感じさせるものは何一つない。

もっとも、私たちが一般に宗教と呼ぶ行為や慣習を考えてみれば、その多くは、ゴントやケントの振る舞いを大きく超えるようなものではあるまい。実際、自らは何もしようとせずひたすら神や自然に助力を乞うリチャードの祈願はともかく、神に報復を委ねるよう促すゴントの説諭やことの成り行きをすべて神の意志に帰してそれ以上掘り下げようとしぬケントの態度について、私たちがその非を鳴らすとしても、ではいったいそれに替わるどのような手立てが彼らにあつたのかと問い返されれば、答えに窮するというのが実情だろう。

身の回りに不幸なことがあれば神に救いを乞い、幸せなことがあれば神に感謝の言葉を捧げ、そして、自分の力を超えるようなことについては神の意志に委ねるといふのは、ごく当たり前の反応ともいえ、敬虔で慎み深い人の振る舞いとして、称賛されてもおかしくあるまい。

そういった、一般的に言えば誠実で敬虔な人々の振る舞いが、この劇にあつては、困難な状況に置かれつつける中で、むしろ救いよのない欺瞞、自身の無為、無力さの表明と映るようになってゆくのである。そして、ひとたび、そういう目で人物たちの言動を見るように条件づけられた観客なり読者なりには、それを経なければあり得たであろうようなナイヴな見方に戻ることとはもう許されぬ。むしろ、そういう形で劇の結末を受け入れること自体、そのナイヴな見方のうちに潜む欺瞞性を暴露することになりかねない。しか

し、その一方で、先ほどから見ているように、この劇には、では、それに替わるどういった態度が真の信仰、神に対する嘘いつわりのない帰依としてあり得るのかという問いに対する答えも、少なくとも明確に触知できるかたちでは用意されているように見えない。グロスター公爵夫人に対するゴントの説諭をもの足らないように思ひ、ポリンブルックの政權奪取を神の意志として受け入れようとするヨークの態度に胡散臭さを感じるとしても、それらに取って替わるべきあり方もまた見えないのである。

同様に、下座にあつては専横の限りを尽くしながら、ポリンブルックの蜂起を前にすると、自らその状況に正面から対峙することもなく、ひたすら神や自然の助力を当てにしようとするリチャードの振る舞いが、聖別された君主のあり方として神の是認を受けるものではないとしても、では、巧みな演技・演出によって人々の熱狂的な歓呼を受けるポリンブルックこそが君主の理想の姿として神の裁可を受けるべきかといえは、ことはそれほど単純で容易な話ではあるまい。神の御心に適う理想の君主というのは抽象的な理屈としてはあり得ても、生身の人間としてどういう存在を指しているのか、少なくともこの劇の結末から浮かび上がってくることはない。

こうして、劇は、一見したところ、リチャードの悪政に苦しむ人々の困難な状況を描くことに始まって、ヘンリー・ポリンブルックによる政權奪取によって一定の秩序が回復されるところで閉じられることになる。けれども、劇の当初から顔を覗かせていた人々の内面の混乱は、アクションの展開を通して鎮められるどころか、むしろ

いつそう深まり、その解決の糸口も与えられないまま、捨て置かれていくように見える。

劇の終幕近くに登場するリチャードについて、そこに、一人の人間としてそしてまた王として、己がどうあるべきだったのかということについて覚醒の萌芽のようなものが感じられるが、それすら無造作に断ち切られるということを見たが、それと同じように、彼を取り巻く人々の敬虔な言葉も、劇の世界に対して何か説得力のある展望をもたらすということは一切なく、観客や読者は、劇を通していつそう広がった心の空白を埋めるべき何の手立てもないままに残されるのである。かつてウィルバー・サンダースは、その著書『劇作家と通念』の中で、『リチャード二世』を論じた章に「シェイクスピアの政治的不可知論」(註五)というタイトルをつけたが、この名称は、こういった作品の展開と結末を考えれば、いかにも的を射たものであるように思われる。

けれども、劇作家は、この荒廢した世界でただ呆然と立ち尽くしているわけではない。理解を阻む不可知の世界にあつて、それでもなお、シェイクスピアは、その世界を把握し、その世界と人間とのあるべき関係を探るべく、次に来る作品、さらにその次に来るはずの作品を構想し案を練っているのである。

- (一) Wilbur Sanders, *The Dramatist and the Received Idea* (Cambridge: Cambridge University Press, 1968), p. 166 や参照せよ。
 (二) E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's History Plays* (London: Chatto & Windus Ltd., 1944), pp. 251f.
 (三) Peter G. Phialas, "The Medieval in *Richard II*," in *Shakespeare Quarterly*, vol. XII (1961), pp. 305-10.
 (四) シェイクスピアからの引用の幕場・行数の表示は、サント G. Blakemore Evans (ed.) *The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin, 1974) に拠る。引用の誤はすべて私自考のゆゑである。
 (五) Larry S. Champion, *Shakespeare's Tragic Perspective* (Athens, Georgia: The University of Georgia Press, 1976), p. 53.
 (六) David Bevington, *Tudor Drama and Politics* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1968), pp.156-67, 230-69; Sanders, *op. cit.*, pp. 1-71; Tillyard, *op. cit.*, pp.64-70; Felix Raab, *The English Face of Machiavelli* (London: Routledge and Kegan Paul, 1965), pp. 8-76; Moody E. Prior, *The Drama of Power* (Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 1973), pp. 83-100 や参照せよ。
 (七) Peter Ure (ed.), *King Richard II* ("The Arden Shakespeare";

London: Methuen Co. Ltd., 1961), p. lxx.

- (八) A. R Humphreys, *Shakespeare: Richard II* ("Studies in English Literature"; London: Edward Arnold, 1967), p. 30.
 (九) Ure (ed.) *op. cit.*, p. 95.
 (一〇) この挿話に対する Robert Pierce の論評を少し引いておこう。リチャードの生きる世界に現実感が欠けていると評して「ピエースは、こう続けている」。
- 彼〔リチャード〕は、人とのあいだに真に親密な関係を持つことが出来ない。彼とイザベラの別れが、ごくありきたりなものにならざるを得ないのはそのためである。彼の苦しみは嘘いつわりはないが、それは全くどうしてどうは、自己中心的である (Robert B. Pierce, *Shakespeare's History Plays: The Family and the State* (Columbus, Ohio: Ohio State University Press, 1971), p. 166)。
- (一一) Prior, *op. cit.*, p.149.
 (一二) *Ibid.*, p.154.
 (一三) 高田茂樹「理想の君主を演じる——『ヘンリー五世』への道」(日本シェイクスピア協会編『蘇るシェイクスピア—没後四〇〇年記念論集』(研究社、二〇一六)、五〇—一七四頁)
 (一四) Sanders, *op. cit.*, p.157.
 (一五) *Ibid.*, pp.158-93.